

# 米留學について 個人と国家の関係を ついで改めて考えを めぐらせる

吉岡太史

目の網膜の病気で視力が落ち教師としての仕事が十分にできなくなったため、二〇一四年三月に四十七歳で退職しました。幸いなことに、ライト付きの拡大鏡を使えば字を読んだり書いたりできるので、在職中より関心のあったアメリカの東アジア政策について勉強したいと考え、米留學を決定しました。同年四月、大阪の英語学校に入學。一年間英語を学んだ後、二〇一五年八月、英語学校の提携先である米國ネバダ州立大学リノ校に入學しました。リノ校では二年間、政治学、歴史学を学ぶとともに、大学院への進学を目標に英語の勉強も続けました。以下、これまでの経験や感じたことなどを紹介し

ます。  
はじめは英語についてです。これは本当に難しく、とりわけリスニングとスピーキングには苦労しています。教科書の内容についての講義や背景知識のある話題については何とか聴きとれるのですが、話題が発展したり別のトピックに移ったりすると、さっぱりわかりません。他の留学生たちが流暢に英語を操り教授の冗談に笑い声を上げているのを横目で見ながらじくじたる思いをすることがしばしばです。



はじめは英語についてです。これは本当に難しく、とりわけリスニングとスピーキングには苦労しています。教科書の内容についての講義や背景知識のある話題については何とか聴きとれるのですが、話題が発展したり別のトピックに移ったりすると、さっぱりわかりません。他の留学生たちが流暢に英語を操り教授の冗談に笑い声を上げているのを横目で見ながらじくじたる思いをすることがしばしばです。

日常生活での英語の失敗も山ほどあります。売店でホットコーヒー注文したのにホットドッグが出てきたり、大学の診療所に目の病気の情報を聞きに行ったはずが、なぜか診察台に座らされて血圧を計られていたということもありました。こんな私でも何とか頑張ってきたのは、リノ校に入學して最初に受講した「アメリカ政治」のアシスタントの大学院生が、私の小論文について、「Hey Futoshi! I enjoyed reading your essay!」と声をかけてくれたからだだと思います。本当にうれしい一言でした。

次に、リノ校の授業で印象に残っていることを二つ紹介します。いずれも「アジア系アメリカ人の歴史」のクラスで学んだことです。そのクラス最初の授業で教授がホワイトボードに年表を書き、あなたの先祖がどの年代にどの国からアメリカに渡ってきたのかを書き込みなさいと指示しました。驚いたことに四十人ほどの学生たちは皆戸惑うことなく、自分の先祖や両親が米國に移住してきた年代と出身國を書き入れました。ドイツと南米からの移民が多かったように記憶しています。米國の歴史と今が移民問題と密接に関係していることを実感させられた一幕でした。

もう一つは、日系アメリカ人の歴史を学んだことです。明治以降数多くの日本人が米國に渡り、苦難を乗り越えて新しい生活を築いていきました。しかし真珠湾攻撃を境にその生活は一変します。強制収容所への移送、そして米國への忠誠と「米國市民」としての矜持を保つために進んで米國軍隊に志願する日系二世の若者たち。私は課題の小論文でハワイ出身の日系二世ダニエル・イノウエの足跡を追いましたが、真珠湾攻撃の直後、救護所へと駆けつけるイノウエの自転車に年配の日系人が取りすがり、「日本がやったんじゃないだろう？ドイツだ、ドイツにきまってる」と泣き崩れた話が心に残ります。「二つの祖國」の間で揺れる日系人の歴史に触れ、個人と国家の関係について考えています。

以上、英語習得の難しさと、移民と日系人の歴史について触れました。両者の間には直接の関連はありませんが、私自身、この二年間余り母語でない言語を話し、日本の外にある歴史と社会に触れることを通じて、これまで以上に個人と国家、そして日本という国について考える機会が増えました。この七月より、ワシントンDCに移り、The Institute of World Politics という大学院修士課程に特化した小さ

な学校で米國の外交政策を学び始めました。リノ校での経験をもとに今、スタート台に立った気がしています。

## 北高定時制夜間部から 「原点に帰れ！」を 実感する毎日

林 博子

皆さんご存知の通り、北高は生徒数も多く、日程も勤務もシステムも異なる通信制・定時制昼間部・夜間部の3課程からなる学校です。夜間部は6クラスで生徒数が101。長く続いていた看護科は今年度で募集停止になりました。

定時制という年齢はまちまち、年配の先輩たちが若者と学び、時には教師を叱り罵め(笑)のイメージがありましたが、今は中学校卒業すぐか他校からの転・編入生がほとんどで、かつての面影はまったくありません。入試で失敗し、不登校や学校生活に馴染めないまま入学してくる生徒が多く、最初からできないとあきらめる生徒やまず授業で座ることから始めなければならぬ生徒など一人一人の学力や興味関心に大きな差があり、「わかりやすく楽しい

授業」を目指して教える側も苦戦しています。まさに「原点に帰れ！」を実感する毎日です。大半の生徒は昼間アルバイトに苦しく課題を抱える家庭が多く、学ぶ楽しさを体験し、行事や部活動等仲間と作り上げていく時間も十分持てていないのが現状です。

教職員の勤務は13...30...22...00。夜が遅いのを除けば、授業は5...50からの4時間で、教材研究やホームの仕事などに時間が取れ比較的ゆったりした職場です。長時間労働・多忙化が言われて久しいですが、代休・年休も取りやすく、教職員同士協力し気遣いあう余裕が残っているように感じます。それでも統一成績管理システムやeが一人2台になり指紋認証が導入される等々、現場の実態を無視したシステムや制度が次々おとりてきて、年々窮屈になってきています。

高校の統廃合・再編が推進される中、定時制の役割とは何なのか。定時制にやってくる生徒たちにとって何が必要なのか。その意義が問われているし、みんな考えてなければと感じています。

## パソコンが一人二台に 人も増やして もらいたい

高教組委員長 竹島久美

私が採用になったころと職員室の景色もだいぶ変わっています。煙草の煙がなくなつて空気が透明になった感じがしますが、一番変わったのはパソコンが各自の机の上にあることでしょうか。とい

紙の資料が減ったという感じはしませんが、特に自分の机の上は。かえって年数が経った分増えてしまっているような。

この夏ごろから、パソコンがノートパソコンとタブレットの一人二台になりました。インターネットでの調べ物などはタブレットの方で、成績を入力したりいろいろの手続きをくったり秘密のものはノートパソコンのようです

## 会費納入のお願い

今年度の高退協の会費納入がまだの方は、早急をお願いします。

(よくわかりません)。ノートパソコンに入るには指紋認証が必要になります。指紋や顔や眼での本人確認なんて近未来のイメージでしたが、在職中に入るとはびっくりです。新しい何かが入るたび、いろいろパソコンの設定をしなければなりません。さっぱりわからず、人に頼らないといけないので肩身の狭い思いをしています。世話をする学校の情報の担当者は本当に大変です。また、仕事自体は減らないままでかえって増えているというのに、セキュリティ強化でパソコンを使う仕事は家に持って帰りにくくなっています。お金もいっただいからかかっているのでしょうか。パソコンを増やすだけでなく、人も増やしてもらいたいものです。

パソコンは便利ですが、トラブルやわからないことがあっても思わぬ時間をとられ、思っていたより時間がかかることもしばしば。多忙化解消の切り札とはいかないようです。